

〔巻頭言〕

## 発行にあたって

浄土真宗本願寺派総合研究所長

大田利生

われわれは、教義・教学に関して論ずることは多い。論考も夥しい数にのぼる。それに比して、教団に関する考究はそれほど多くはみられない。それは、教団論に関する関心の希薄さを示すものであるのか、それとも、教義と教団論を切り離して考えられていることにその要因があるといえるのかもしれない。

教義・教学によつて教団の動きが方向づけられていくとするならば、教義と教団を切り離して論ずべきではないだろう。従つて、教団論を掲げるということは、同時に教学についても研究を進めていかなければならないと言える。

また、大きく変容していく時代状況の中で宗教教団のあり方、存在意義が問われている状況も見逃すことはできない。それは、教団の維持・継承がこれまでの方法では困難になりつつあることを示すものであろう。今こそ、教団論の展開がなされるべき時であり、それを始動させなければならぬ。

その意味で、今回の『浄土真宗総合研究』（第18号）のテーマを「仏教における教団―歴史と現在―」とされたことは、まことに時世に適い意義深いものを感じられる。

また、宗門の宗務方針に掲げられている「伝わる伝道」の基礎的研究という位置づけも、教団論研究にできると言える。そのことは、教団と伝道ということをこれもまた切り離して考えることはできないということである。教団あつての伝道であり、伝道していくことが教団の活性化に繋がっていく、従って、教団の存在意義は伝道がなされていることにあると言えるのである。

また、従来から言われている時代即応の教學を考えることも教団論を論ずることと無関係とは言えない。

掲載されている論文一篇一篇、興味深いものであり、真摯にとり組んだ様子が窺える。その内容については、寺本知正先生から内容紹介・コメントをいただいた。研究員それぞれがさらに論考を深められ、教団のあるべき姿を、そして伝道、教學についても論文としてまとめいただくことを期待して簡略ながら巻頭のことばといたします。